

クライスト研究： 『シュロフェンシュタイン家』について — Mißtrauen と Vertrauen を中心にして —

南 勉

クライストの処女作『シュロフェンシュタイン家』(Die Familie Schrof-fenstein)は、1803年にゲスナー出版から匿名で出版された。この作品の成立事情は極めて複雑であり、着手時、完成時等を含め詳細は判然としていない。⁽¹⁾当該作品は、処女作だけに内容形式両面において部分的にやや不自然な点があるが、若きクライストの本領がいかに発揮されている。

当該作品の筋は実に凄惨である。分家関係にあるロシツとヴァルヴァントの両シュロフェンシュタイン家は、相続契約とそれに端を発する不信の念から不和対立の関係にある。ロシツの当主ルーペルトは、末息子の突然の死を状況証拠からヴァルヴァント側による殺害と断定し復讐を誓う。彼は、宣戦布告の使者を送る。その使者は、不当にも殺害される。ルーペルトは、激怒からヴァルヴァントの当主ジュルヴェスターの娘アグネスの殺害を企図する。ジュルヴェスターは、使者がわりにロシツへ送ったイエローニムスがルーペルトによって故意に殺害されたために、報復として軍隊を組織してロシツへ赴く。両家に対立している間、ルーペルトの子息オトカールとアグネスは、相互の不信の念を克服して愛の絆で結ばれる。二人は、両家の対立の原因を認識して解決のための努力を重ねるが、不幸にも実の父親によって刺殺される。二人の父親は、殺害行為によって自分たちの最も大切なものを失ってしまう。

この戯曲は、シェイクスピアの悲劇『ロミオとジュリエット』の影響を強く受けて執筆された。⁽²⁾両戯曲には共通のモチーフがいくつかあるが、両者は基本的に全く異った作品である。シェイクスピアの作品の場合、対立する両家は分家関係にない。主人公たちの愛に理解を示し結婚させる修道士がいる。両家の対立を抑制できる大公がいる。主人公たちは、殺害されるのではなく自ら死を選択する。この四点だけでも両作品がいかに異っているか容易に理解できる。シェイクスピアの場合、主人公たちの愛の悲劇がくっきりと浮き上がってくる。

それにひにきかえ、クライストの場合全てが内面的であり、恋人たちの理解者はなく、両家の対立を抑制できる人物も登場しないので、どちらかと言うと愛の悲劇よりも二人の父親の悲惨さの方が読者に強いインパクトを与える。シェイクスピアの描く世界は比較的明るいのに比し、クライストの描く世界は孤独で不安な世界である。

当該作品のポイントは、〈不信〉と〈信頼〉のダイナミズムである。対立する両家の不信は、信頼と愛によって結ばれているオトカールとアグネスを殺害することによって信頼を否定するが、結果不信も否定されてしまう。この構造に当該作品の大きな意味が秘められている。本稿において、このような観点から〈不信〉と〈信頼〉を手がかりにして作品を考察してみたい。

本稿の構成は以下の通りである。第一節において、相続契約とそれに関する両家の解釈について考量する。第二節において、ロシツの当主ルーペルトとその妻オイスターへの性格と発想を分析する。第三節において、ヴァルヴァントの当主ジュルヴェスターとその妻ゲルトルーデの性格と発想を分析する。第四節において、オトカールとアグネスが不信を克服するプロセスと二つの価値について考究する。第五節において、両家の使者たちの役割と死について論じる。第六節において、アグネスとオトカールの婚約の秘儀と着衣交換の意味、父親たちによる刺殺について論じる。第七節において、クライストが好む榎の木の形象について論じ、作品世界を総合的に考察する。

第一節

当該作品は、ロシツとヴァルヴァントの両シュロフェンシュタイン家の間の不信に端を発する烈しく凄惨な争いによって何人かの人々が殺害され、愛の絆で結ばれているオトカールとアグネスまで刺殺されてしまう、名状し難い悲惨を描出している戯曲である。両家は作品の結末まで憎みあっており、その憎悪と不信は読者の心胆を寒からしめる程である。両家は何故これ程までに憎みあうようになったのであろうか。その淵源は、古くから両家の間で結ばれている相続契約である。まずこの相続契約について考えてみよう。ロシツ領教会管理人の説明によると、契約の内容は以下の通りである。

古来より、ロシツとヴァルヴァントの両伯爵家にはある相続契約があるのです。

その契約に基づいて、一方の相続人が死に絶えた場合
全財産は、別の相続人のものになること
なっているのです。(S.57)

相続契約は、本来両家の平和と繁栄を願って結ばれたものであるが、ここにおいては争いの原因になっている。何故なら、契約が結ばれてから幾世代もの世代交替があると当初の精神が忘却され、文書になった契約が当初とは異なる状況下で両家にとって桎梏になっているからである。この契約における問題点は、相続人の断絶と財産相続である。どちらかの家系が他の伯爵家の財産に目がくらんだ時、その前提となる相続人の断絶を望むようになる。その場合両家の間に不信と不和が生まれ、双方とも疑心暗鬼に陥ってしまう。一方の伯爵家の世嗣が病のために死に瀕する時、他の伯爵家の当主は契約に基づいて全財産の譲渡を望むようになる。そしてその願望は契約に基づいているために、当然のことに正当化される。教会管理人は言う。

私たちの今の御当主が世継ぎに立とうとした時
突然病に倒れ、二日も人事不省が続いたのです。
だから一同御当主御他界と思ったのです。
そしてジュルヴェスター伯が遺産を相続する段になった時
御当主は、けろりとよみがえられたのです。(S.57)

これはおよそ二十年前に起きたことである。この説明によると相続契約は大きな意味をなしており、ジュルヴェスター伯もこれを前提にしてロシツ領の遺産相続を正当な対応と判断している。しかし瀕死の世嗣がよみがえった以上相続が不可能になるので、この事実は立場の違いによって様々な解釈を生む余地を残す。ロシツ側では、「その時以来、ジュルヴェスターは私どもの領地を、犬のくわえている骨を狙う猫のように、横目ににらんでいたのです⁽³⁾」という解釈が生じている。これはあくまでもロシツ側の解釈であり、客観的な根拠はない。ジュルヴェスターの対応は、相続契約が存続する限り正当である。しかし、それがロシツ側にとって大きな圧力となり、複雑な意識を生じさせていることが、ロシツ側の解釈からはっきりと読みとれる。ロシツ側にとって、契約の意味がかつとは異っている。ロシツ側は、別言するとこの契約をもはや正当なもの

とみなしていないのである。この認識は、両シュロフェンシュタイン家がこの時点でかつての分家関係にないことを示唆している。両家は系譜的には分家関係であるが、実質的には自立しており、双方が固有の発想をもっている。この事情は、ロシツとヴァルヴァントともに共通している。

- アグネス　この騎兵たちは私たちです。
 そしてこの歩兵たちはロシツ側です。
 そうあの子は言ったのです。
- ジュルヴィウス　違うよ。お前は間違っている。この歩兵たちはロシツ側ではなく、敵だった。
- アグネス　そうよ。私も敵のロシツ側と言うつもりだったの。(S.67)

ジュルヴィウスはヴァルヴァントの前当主であり、アグネスはその孫娘である。祖父と孫娘との対話の中に、〈敵〉とか〈敵のロシツ側〉という表現がある。一見看過しそうな何気ない対話の中に、両家の現実の関係が如実に反映されている。ヴァルヴァント側も、ロシツ側を〈敵〉と位置づけている。

ロシツとヴァルヴァントの両シュロフェンシュタイン家は、もはや協調的な関係にはなく相互に反目している。双方が自立して、独自の個性を発揮し独自の発想を展開している。しかし成文化された契約は、実情とは無縁に両家をしぼる桎梏となっている。これが、悲劇の淵源であり、そのために両家は不信と憎悪の念から烈しく対立するのである。

第二節

ロシツの当主ルーペルトは、ヴァルヴァント側に対して激しい憎悪の念を抱いている。彼は、相続契約に固執して内心秘かにヴァルヴァント領の譲渡を望んでいる。彼は、この願望を前提にして全てを主観的に合理化する。彼はある日山中を歩いていた時、自分の末息子の亡骸のそばで血のついたナイフを携えている二人の騎士を見出した。彼は、怒りのあまり一人を斬殺し、息のあった一人を拷問にかけた。拷問を受けた男は、「ジュルヴェスター⁽¹⁾」と一語言って死去した。この一語だけでは、二人が息子の殺害者であるという絶対的な根拠にはなりえない。しかし、ルーペルトの発想から見た場合、この一語だけで十分

なのである。彼は息子の遺体や状況を調査せず、ヴァルヴァント側の刺客によって殺害されたと断定する。これは、ルーペルトの願望に基づく主観的な合理化である。彼にとって、息子の死因が何であるかは問題にはならない。ヴァルヴァント側を非難できる根拠のみが重要なのである。彼は息子の死を悲しむどころか、それを非難の好材料としてヴァルヴァントに罪をきせ、一方的に復讐を誓う。彼の認識は一面的であり、事実とは全く無縁である。彼は、認識を決して改めようとしなない。

Vertrauen, Unschuld, Treue, Liebe,
Religion, der Götter Furcht sind wie
Tiere, welche reden. (S. 52)

(訳) 信頼だ、潔白だ、誠意だ、愛だ、宗教だ、
神々への畏怖だと言った所で、それらは
せいぜいものを言う動物のようだ。

この発言には、ルーペルトの人生観や現実認識が如実に反映されている。彼は、「信頼、潔白、誠意、愛、宗教、神々への畏怖」を「ものを言う動物のようなもの」と規定している。彼は、人間性の本質に根ざすく善なるもの>を容認しない。彼は、不信の念(Mißtrauen)で凝り固まっている。彼の目は、感覚によって導かれていないために明らかに病んでいる。ルーペルトは泉の水に映る自分の顔を眺めた時、自分の顔が「悪魔」⁽⁶⁾に見える。彼は、「人間のなりをしたサソリ」(Skorpion von einem Menschen)⁽⁷⁾なのである。

ルーペルトの妻オイスターへは、婦徳の高い聡明な婦人である。彼女は、夫のように独断や偏見に支配されていない。彼女はまた、理由なく他者を憎んだり責任を転嫁したりしない。彼女はルーペルトから復讐の誓いを要求された時その要求を退けている。夫が復讐の念で冷静さを失っている時、彼女は「ひどい侮辱を受けた人は、復讐という行動のために分別を奪われ、怒りという敵の味方が生じるというまづい結果を招くのです」と述べて夫を戒める。オイスターへは理性的であり、夫に対して適切に配慮し妻としての役割を十分に果たしている。彼女は、更に夫の性急粗暴な企図に対して冷静に危惧を表明する。

あらかじめ検討して

仇討ちを先へのばせないでしょうか。
 復讐の腕をしぼるつもりはありません。
 唯うまくゆくようにその手を導きたいのです。(S.53)

オイスターへは、ここで夫に理性を求めている。彼女は、調査によって事態の本質を見きわめようとしている。この引用の後の二行を文字通り理解すると、「合法的で効果的な復讐ができるように、他者の側の罪の確信を望んでいる」⁽⁹⁾ようにも理解できるが、このような見解はいささか皮相である。オイスターへは妻としての立場に立脚しているので、夫の発想を安易に否定しない。彼女は、自己の役割を的確に認識し、かつ理性的であるために、軽挙妄動に安易に加担しないのである。

第 三 節

ヴァルヴァントの当主ジュルヴェスターは、ルーペルトとは異なり他者に対して不信の念を抱いていない。彼は、妻ゲルートルーデが理由なく不信の念をあらわした時、次のように述べている。

Das Mißtrauen ist die schwarze Sucht der Seele,
 Und alles, auch das Schuldlos-Reine zieht
 Fürs kranke Aug die Tracht der Hölle an. (S. 69)

(訳) 不信は魂が黒くなる病気だ。

だから全てが、汚れなく純粹なものさえ
 病んだ目には地獄の着物をまとっているように見えるのだ

ジュルヴェスターは、不信の本質を的確に把えている。不信は「病んだ目」と係わっている、ジュルヴェスターの目は、決して病んでいない。この限りにおいて、彼はルーペルトの対極である。彼は、過去に一切固執しない。娘のアグネスが弟の死を悲しんでいる時泣かないように指示し、妻に対してもこだわりをもたないように勧める。彼のこのような対応は、あたかも善意の人であるかのような印象を与えるが、決してそうではない。彼は、自己の判断を強要しているにすぎない。そのために、彼は他者の心情を理解できない。ロシツ側からの一方的な非難に対して、彼はその理由も尋ねず、実態も調査せず、ルーペ

ルトとの話し合いを希望する、彼の臣下たちが彼の意志とは無縁にロシツ側の使者を殺害した時、その不当性を強く自覚しているにも拘らず、彼は一切適切な対応をとらない。彼の発想は、極めて主観的であり、現状を的確に把えることができない。ジュルヴェスターは、不信の人ではないので一見善意の人に見え、しばしばオイスターへと比肩されるが、的確な判断を下せる理性的な存在では決してないのである。

ジュルヴェスターの妻ゲルトルーデは、不信の念の強いルーベルトに酷似した女性である。彼女は、強い偏見に支配されてロシツ側に対して激しい不信と憎悪を抱いている。彼女は、わが身にふりかかった不幸の原因を省みもせず、その責任を他者に転嫁しようとする。彼女は、客観的な根拠がないにも拘らず息子の死の原因がロシツ側にあると考えている。それどころか、息子の死を強引に7年前の娘の死にまで関連づけようとする。

—— 7年前に私の娘が死んだ時

あの人たちは、なぜ弔問しなかったのかしら

あれは単に嫉妬ではなかったもの！

病気の報がロシツに届くや否や

使者が追っとり刀でやって来て、城中を大慌てで

「御息子は病気なのですか」と尋ねまわったのです。

—— もちろん多くの人が知っています。それほどまでに

あの人たちが気にしてるのは何でしょう。

つまり相続契約なのです。(S.67-68)

この発言は、ゲルトルーデの発想を的確に物語っている。彼女は、現在の出来事を過去の事実に基づいて分析して認識する。引用から明らかなように、彼女は相続契約を強く意識している。彼女にとって、娘の生命よりも契約の方が大切なのである。彼女はルーベルトと同じ発想に立脚しており、彼女の目も病んでいる。彼女は、常に現実を不信というメガネを通して見つめている。それだけに、彼女はジュルヴェスターとは異なり現実感覚が鋭く、ヴァルヴァントの雰囲気を的確に把えているのである。

第四節

オトカールとアグネスの出会いの場は、常に山中である。この山中は、ロシツ領ともヴァルヴァント領とも明確に位置づけられていない。山中は自然の中であり、いわば両家の外である。山中が出会いの場であるという事実は、二人の運命と本質を象徴的に示唆している。両家の子供たちは、しばしば山中へ出かける。とりわけアグネスは、母の忠告にも拘らず常に一人で山中へ行く。ルーペルトの庶子ヨーハンの目に映るアグネスの姿は裸体であり、天使のようである。

きらきらと輝いて、まるで女神のように
 水の中から出てきたのです。もちろん私はその美しさを
 ちらっとしか見なかったのです。と言うのは
 再び目に光がもどってきた時、
 あの人は衣服をまとっていたのです。(S.61)

これは、ヨーハンが馬もろとも谷に落ちて傷の手当てを受けた時のことである。アグネスが裸体であるということは、注目に値する。裸体とは、生まれた時の姿である。その本然の姿がきらきらと光を放っている。この形象は、アグネスの本来の姿を予示している。裸体は、心が開かれているということの象徴である。⁽¹⁰⁾そしてアグネスの慈悲的な行動は、この世ならぬもの、すなわち天使を暗示している。⁽¹¹⁾これに対し、衣服は本来の姿を隠す被いである。衣服は、人間にとって異質で外的なものであり、原罪後の時を示している。⁽¹²⁾アグネスは、美しい姿に衣服をまとっている存在である。アグネスの衣服は、両シュロフェンシュタイン家の色濃くおおっている不信を暗示しているのである。

両家の不信と対立は、オトカールとアグネスの意識にも色濃く影をおとしていく。オトカールはアグネスに対して秘かに恋情を抱いているが、アグネスが自分の家と敵対関係にある伯爵家の娘であるだけに、オトカールの心中は複雑である。二人の一回目の対話は、この状況を的確に把えている。

アグネス　——あなたは人を殺す話をしていたわ。
 オトカール　愛のことを話ただけだよ。
 アグネス　確かに私とは愛について話してくれたわ。

でも人を殺すことについては誰と話したの。

(S.78)

愛 (Liebe) と殺害 (Mord) は、相互に相容れない。アグネスは、不安を感じている。また、彼女はオトカールとの最初の対話で深い不信の念をはっきりと感じとっている。彼女は、そのためにオトカールに名前をきかれても決して答えようとししない。二人は、名前に強いこだわりを感じている。何故なら、名前は人格の本質をかくす形式にすぎず、ヴァルヴァントと言う人はロシツの人々から一義的に敵と思われ、ロシツに賛成する人はヴァルヴァントの敵と宣告されるからである。⁽¹³⁾オトカールとアグネスの最初の対話は、厳しい現実の重さに圧迫されている。二人は、この現実には抗えない。

オトカールとアグネスの二回目の対話は圧巻であり、作品の華である。クライストは三幕第一場全体をこれにあてている。オトカールは、この対話の中でアグネスのことをマリアと名づける。

ぼくは君に名前を尋ねた。

まだ名前がないの、と君は言った。

ぼくはそこで泉から手に一杯水をすくってきて、

君の額と胸に水をひたして、こう言った。

君は聖母の似姿だから

君をマリアと名づけようと。(S.95)

この場面は、まさしく洗礼の儀式である。ところでオトカールは、何故アグネスにわざわざ洗礼を施すのだろうか。アグネスは、マリアとして「美しい本」のようにオトカールに対して開かれているが、アグネスとしては「封印された手紙」である。⁽¹⁴⁾またアグネスという名前は家族から与えられたものであり、彼女の本質をあらわしてはいない。⁽¹⁵⁾オトカールは、アグネスが聖母の似姿なのでマリアと名づけている。アグネスはアグネスのままでは復讐を誓った敵方の娘なので、オトカールは洗礼によって彼女をヴァルヴァントから切り離し、主体的に恋人として選びとっているのである。ここに、この洗礼の大きな意味が秘められている。

アグネスは、洗礼の儀式によってオトカールの心情を十分に理解する。彼女

は、「毒であろうと水であろうといいわ。私はそれを飲みほすわ⁽¹⁶⁾」と納得して、彼がくんでくる水を飲む。

アグネス 全部飲むの？
 オトカール 飲みたいだけね。
 十分あるから。
 アグネス ちょっと待って。
 あなたの望む通り何でもするわ。
 オトカール これは薬のように効くんだ。
 アグネス 悲惨に対してもね。(S.97)

水に関して、アグネスは毒(Gift)という語を4回使っている。彼女は、ヴァルヴァントで形成された自我を否定する覚悟ができている。オトカールにとって、水は毒ではなく、薬(Arznei)である。彼は、アグネスを癒す医者(Arzt)なのである。二人はここで不信を克服し、信頼の絆で強く結ばれる。

オトカールはヨーハンに、「人はみな二つの価値をもっている。その一つは自分で知るようになるが、他の一つは問い求めねばならない⁽¹⁷⁾」と述べている。一つの価値は愛である。ところでもう一つの価値は、「問い求めねばならない価値」とは一体何であろうか。それは、「相対するものと争わないこと」(Schiedlichkeit des Gegenübers)⁽¹⁸⁾である。つまり、自我と他我との不和对立ではなく、その解消をうまずたゆまず求め続ける営みである。愛を成就したオトカールとアグネスの課題は、この第二の価値を求めることである。両家の間の不信と対立は、直接的で冷静な対話が欠如しているために、また間接証拠による思弁によって裏打ちされて認識にまでなっているために容易に消失せず、両家の人々は誤解と偏見に強く支配されている。直接的な対話と愛によって不信を克服した二人は、誤解や不和对立から完全に免れている。

もう少し待って。一つの誤解が消えれば
 ほかのも次から次に消せるだろう。これからぼくが
 何をやる気かわかるかい。弟の遺体の両手の同じ指が
 つまり小指がないのが、ずっとぼくの注意を引いていたんだ。

(S.101-102)

オトカールは、先入観から免れて理性的である。この指摘は、悲劇の核心についている。ロシツの人々は、不信と憎悪から拷問にかけられた男の一語にのみ注意を向け、切除された両手の小指を等閑視してきた。これは大きな盲点であるが、彼らは、それに一向に気づかない。何故なら、彼らは自我とその発想にあまりに固執しているために、事実を事実として受けとめられないからである。それに反し、オトカールとアグネスは、ロシツとヴァルヴァントを超えた新しい地平に立脚しているのである。

第五節

ロシツ側の使者アルデーベルンは、ルーペルトの愚直な臣下である。彼は、ヴァルヴァントでジュルヴェスターから席をすすめられたにも拘らず、立ったまま主君の伝言を言葉通りに伝達する。

よって主君の言葉をそのまま申し上げる方がよろしいでしょう。

それはこうです。貴殿のお城に絞首台を設ける所存である。

わが主君が所望するのは、貴殿と貴殿のお子様の

つまり貴殿のお子の血なのです。

——わが主君はそう繰り返したのです。(S.90)

アルデーベルンのこの発言は、立派な宣戦布告である。しかし、ジュルヴェスターはその真意を理解できない。彼は、その理由を尋ねようとしめない。それどころか、彼は理由もないまま現実を否定し、全てを狂気として片付けようとする。またアルデーベルンが身の危険を再三指摘するにも拘らず、彼はルーペルトとの直談判を希望する。ジュルヴェスターは決して悪意の人ではない。彼は、自分の発想に固執しているために現実を認識できない。これまで相互の争い、憎しみと中傷という現実を否定してきたので、ルーペルトの宣戦布告は彼にとって狂気としか思われないのである。⁽¹⁹⁾ジュルヴェスターは、自己の発想を超えた現実に直面した時失神して倒れてしまう。失神というモチーフは、クライストの他の作品でもしばしば用いられている。失神は実存的な出来事であり、無実を絶対的に確信している人は罪を確信して立ち上がる。⁽²⁰⁾無実の絶対的な確信は、不安を引きおこす。不安を感じる時、人は罪の意識をもつ。絶対的な無実も絶対的な罪も意識にはないのである。アルデーベルンは、ジュルヴェ

スターが失神している間に狂気の家臣たちによって石で殺害される。使者の殺害は不当 (Unrecht) なことである。⁽²¹⁾これは、決してジュルヴェスターの故意ではないが、明らかに不覚の過誤であり、「Gewalt」(暴挙)である。アルデーベルンは、自らの死によって使者としての役割を十分に果している。

ルーペルトの庶子ヨーハンは、決して正式の使者ではないが作品において大きな役割を果している。ヨーハンは、秘かにアグネスを愛しているが、彼の立場は弱い。アグネスがオトカールを愛していることを知った時、彼は生きる希望を失う。彼は、ロシツにおいて自己の存在意義を感じていない。「人生がぼく⁽²²⁾にからみついていた、牙がぬけて吐き気を催すような体をした蛇のようにね」という言葉は、存在意義のなさ生きる空しさを如実に物語っている。彼の意識は、決してルーペルトによって支配されていない。彼は、無意識にロシツからの脱出を願っている。オトカールに対する決闘が拒否された時、彼はロシツの一員であるという意識がないために、心の恋人アグネスを介して死をとげようとする。

さあ、この匕首をとって、いとしい人よ――

この唇があなたの口付けを求めるように

あなたの手からこの胸はぜひ一突受けたいのです。(S. 87)

ヨーハンの哀訴は、彼の立場から見た場合悲痛である。しかし、彼がロシツの一員である以上、彼の心情は決して理解されない。彼は混乱と誤解からロシツからの「刺客」⁽²³⁾と位置づけられ、斬り傷を負って狂乱状態のままヴァルヴァントにとどまる。ヨーハンは、ロシツからの刺客と位置づけられることによって、負の意味における使者としての役割を果している。

ヴィーク家出身のイエローニムスは、両家の客として自由に両家の間を往来する。彼は、アグネスに求婚したためにロシツ側からヴァルヴァント寄りと見られている。彼は、まず両家の不和をめぐるヴァルヴァント側に与する。その理由は、ロシツ側の仇討ちが「無鉄砲なほど性急に、放らつなほど性急に決定された」⁽²⁴⁾ということである。この判断から明らかのように、彼は決定の方法について批判しているが、内容について一切触れていない。彼の発想は極めて安易であり、彼は問題の本質を全く理解しないし、またその意志もない。また確実な根拠に依拠せず、他人の言を盲信している。そして主観的な判断を下し、

自己の判断の適否を検証しようとはしない。このために、彼の判断には一貫性が欠如する。イエローニムスはジュルヴェスターのことを、「娘のまわりでブンブンうなる蚊をたたく」⁽²⁵⁾ぐらいのことはする人と規定していたが、後には「人殺し」⁽²⁶⁾と評価し、この評価もまたくつがえしてしまう。彼は根拠なく判断し、それをくつがえすことに何ら矛盾も苦痛も苦々しさも感じない。彼は、ロシツにもヴァルヴァントにも所属していないので、両家の不和対立を解決する上で有利な立場にあるが、残念ながら問題の本質を認識できない。イエローニムスは、本人の意志はともかく使者としての任に値しない人物である。ルーペルトは、イエローニムスを故意に殺害する。イエローニムスの死は、明らかにルーペルトの„Gewalt“であるが、自ら招いた死でもある。イエローニムスは、ルーペルトの„Gewalt“を引き出すことによって、使者としての役割を終えている。

使者たちは、相手方に„Gewalt“を行使させることによって、十分に役割を果たしている。この後„Gewalt“が一人歩きをはじめ、状況は一気にカタストローフェへ向うことになる。

第六節

ロシツの当主ルーペルトは、自己の認識を改めない。彼の意識には、「邪推ではなく確信」⁽²⁷⁾のみがある。彼は両家の関係を、「木があまりに近く植えてあれば、枝をお互いに傷つけあう」⁽²⁸⁾ものと認識している。彼は、オトカールとアグネスの愛と結婚について聞かされても、唯アグネスの殺害しか考えない。ルーペルトは、明らかに狂気の状態にある。

ヴァルヴァントの当主ジュルヴェスターは、これまで不信を抱かず、過去に固執しなかった。しかし、イエローニムスの死とヨーハンの刺客的行動が、彼の心中に烈しい憤怒をひきおこす。

まあ安心してくれ——これからわしは
他のことは忘れて、復讐のことだけ考えよう。
わしはこれまで忍苦して、雲のように
やつの頭上に浮かんでいたが、今度こそは
稲妻のようにやつの頭上に落ちてやろう。(S.125)

この発言は、怒りに満ちている。彼は、これまで決して粗暴な発言をしなかつ

た。この時点で彼は完全に理性を失い、狂気に陥っている。

ここにおいて、ルーベルトとジュルヴェスターは怒りと不信に完全に支配されて、復讐のとりこになっている。オトカールとアグネスは危険な状況にある。オトカールは、父がアグネスの殺害を意図していることを知っている。彼は、山中の洞窟の中で婚約の儀を行う。その後、彼はアグネスと着衣を交換する。着衣交換は、実に奇抜な発想である。その意図は、アグネスの命を護ることである。オトカールは、アグネスが自分の服を身につけていれば命が保障されると考えている。これは、的確な判断であり、これしか策はない。着衣交換には、もう一つの意味が秘められている。それは、言葉の真の意味においてオトカールとアグネスが一体化したということである。二人の秘儀は完了し、オトカールはアグネスに、アグネスはオトカールに姿を変える。着衣は、名前と同じように人間の本質をあらわさない。

ルーベルトは自己の発想に固執しているために、外観にあざむかれてオトカールを殺害する。彼は、事実に気づかず自分の行動を「正当」と判断する。これは、ルーベルトの„Gewalt“であるとともに運命の„Gewalt“である。

他方ジュルヴェスターも、怒りのために着衣交換という発想を見ぬけない。彼も自分の手でアグネスを刺殺する。これは彼の„Gewalt“であり、運命の„Gewalt“である。

実の父親による子殺しは、悲惨 (Elend) そのものである。二人の父親は償い難い罪を犯しているが、その事実に気づかない。二人の目は、明らかに病んでいる。二人にそれを気づかせるのは、狂乱のヨーハンと盲人のジュルヴィウスである。ヨーハンとジュルヴィウスは、アグネスの姿をした遺体に接してアグネスでないことに最初に気づく。本来のアグネスの遺体に気づくのもこの二人である。ここにおいて、権力者と認識者の立場が逆転し、権力者は狂人と化している。

墓掘人の未亡人ウルズラは、権力者の発想の愚しさと狂気をより鮮明にする。彼女は死んだ子供の手の小指を投げ出した後、次のように述べる。

わたしが小指を切りとったあの子は
殺されたのではなく、溺れたのです。

私が見ついた時には、もう息がなかったのです。(S.151)

この発言によって、ルーペルトの当初の疑念はその根拠を失う。死んだ子供のそばにいた二人の騎士も、子供の死に一切関与していない。二人は、ウルズラが右手の小指を切り取った後「子供のところへやって来た」⁽³⁰⁾のである。ルーペルトの発想は、ここにおいて全て否定されている。絶大な権力を背景にして自己の発想に固執してとった行動は、全て客観的な根拠のない軽挙妄動にして„Gewalt“である。

ジュルヴェスターの発想も、ここで否定されている。彼は、自己の発想に固執するあまり的確に現実を認識できなかった。ロシツ側の使者の殺害は彼の不覚の過誤であり、これがイエローニムスの死を誘発した。彼は、怒りのあまり現実が見えなくなり愛娘を刺殺した。愛娘の殺害は、結果的に自己の発想の否定である。

ルーペルトとジュルヴェスターの不信と„Gewalt“の代償はあまりにも大きい。ここに当該作品の悲劇性がある。「悪魔から顔に炭を塗られた」⁽³¹⁾二人は、その炭を自分の手でとおさねばならない。自己の発想を否定された二人は、罪を償うために、「もう一つの価値」を求め続けなければならないのである。

第七節

ロシツとヴァルヴァントの両シュロフェンシュタイン家は、相続契約に端を発する不信の念から不和対立の関係にあった。ルーペルトは、息子の死をヴァルヴァント側による殺害と独断的に判断して復讐を誓った。ルーペルトの使者アルデーベルンは、不当にもヴァルヴァントで殺される。またアグネスを愛するルーペルトの庶子ヨーハンは、誤解から斬り倒されて狂乱状態に陥る。ルーペルトは、アルデーベルンの殺害に対する報復としてアグネスの命を狙う。ジュルヴェスターは、使者がわりのイエローニムスを故意に殺害された後、これまでの安穏な対応を改め報復の覚悟を固める。オトカールとアグネスは、両家が対立している間に不信を克服して愛の絆で強く結ばれ、お互いに着衣を交換して秘儀を終えてオトカールはアグネスに、アグネスはオトカールに変装する。ルーペルトもジュルヴェスターもこのトリックに気づかない。ルーペルトは、アグネスに変装したオトカールを自分の手で殺害し、その行動を正当化する。ジュルヴェスターも、オトカールに変装したアグネスを刺殺する。二人の行動は、二人の„Gewalt“であるとともに運命の„Gewalt“である。二人は、この行動によって大切なものを失い奪われている。二人は不信に立脚している。アグネ

スとオトカールは信頼に立脚している。オトカールとアグネスの死によって、不信の原理が一見勝利を占めているように見えるが、実際不信の原理は信頼の原理に完全な敗北を喫している。これが当該作品における不信と信頼のダイナミズムである。

Freilich mag

Wohl mancher sinken, weil er stark ist. Denn
Die kranke abgestorbene Eiche steht
Dem Sturm, doch die gesunde stürzt er nieder,
Weil er in ihre Krone greifen kann. (S. 84)

(訳) もちろん多くの人が

強いがために倒れることがある。と言うのは
病いになって枯死した樅の木は嵐に耐えているからだ。
しかし嵐は健康な樅の木を吹き倒す。
何故なら嵐がその樹冠にとりつくことがあるから。

樅の木は、クライストが好んで用いる形象の一つである。樅は、堅くて丈夫な樹木である。これは、強烈な自我をもち、それに固執する人々を連想させる。ここでは、具体的にルーペルトとジュルヴェスターのことであろう。嵐は自然現象であり、にわかに予測できない。ここでは、容易に予見し難い運命と解してもよかろう。丈夫で健康な樅の木は、嵐によって吹き倒される。自我が強く権力を誇る人間は、その強さとは裏腹に運命という、„Gewalt“によって最も大切なものを奪われ、その発想を完全に否定される。吹き倒された樅の木は、もう元の状態へはもどれない。発想を否定された人間も、元の発想へはもどれない。ルーペルトとジュルヴェスターは、犯してはいけない罪を犯したために大きな犠牲を余儀なくされる。

ジュルヴィウス どこへわしを連れて行くんだ、お前さんは？

ヨ ハ ン 悲惨の中へさ、爺さん、おれは愚行だから
御安心なされ！正しい道なのです。

ジュルヴィウス こいつはまいった！森の中に盲人がいて、その
道連れが気違いとはな！家に連れて行け、ねえ、

家に！

ヨーハン 幸せの中へですか！そうは問屋が卸さない。爺さん、そこは中から門がかかっている。さあ、前に行くしかないんだ。(S.148)

認識の人ヨーハンの言葉は手きびしい。ルーペルトとジュルヴェスターの進むべき道は、決して幸福の中へは通じていない。そこは、内側から門がかかっている。その中へはもう入ってゆくことはできない。二人の道は悲惨へと通じている。それは、自己の発想に固執し権力を誇っていたかつての安楽な道ではない。しかし、二人は前へ進まねばならない。二人は、罪を償うために先へ進まねばならない。楽園を追放されたアダムとイブのように……………！

註

- (1) H. v. Kleist: WERKE UND BRIEFE Bd. I AUFBAU-VERLAG BERLIN UND WEIMAR 1978, s. 557-558
- (2) ebenda.
- (3) H. v. Kleist: WERKE UND BRIEFE Bd. I (以下Kleistと略記), C. Hanser Verlag München 1976. s. 57
- (4) ebenda. s. 59
- (5) R. Dürst: H. v. Kleist, FRANCKE VERLAG BERN UND MÜNCHEN 1977. s. 46
- (6) Kleist, a. a. O., s. 132
- (7) ebenda.
- (8) ebenda. s. 52
- (9) E. Irlbeck: Tragödien der Freiheit, Verlag Peter Lang Frankfurt am Main 1986. s. 75
- (10) R. Dürst, a. a. O., s. 26
- (11) ebenda.
- (12) ebenda. s. 52
- (13) Müller-Seidel: Versehen und Erkennen, Böhlau Verlag Köln 1961. s. 61
- (14) H. C. Seeba: Der Sündenfall des Verdachts, in: Dvjs. Jg. 44. s. 79

- (15) R. Dürst, a. a. O., s. 86
- (16) Kleist, a. a. O., s. 97
- (17) ebenda. s. 79
- (18) R. Dürst, a. a. O., s. 86
- (19) E. Irlbeck, a. a. O., s. 76
- (20) H. Ide: Der junge Kleist, HOLZNER VERLAG Würzburg 1961. s. 267
- (21) Kleist, a. a. O., s. 83
- (22) ebenda. s. 87
- (23) ebenda. s. 91
- (24) ebenda. s. 14
- (25) ebenda. s. 54
- (26) ebenda. s. 74
- (27) ebenda. s. 122
- (28) ebenda.
- (29) ebenda. s. 144
- (30) ebenda. s. 151
- (31) ebenda. s. 152